

羊とオールナイト 第4話

仲俣 伊俯

金曜日。23時55分。

男は窓を開け放ち、ある人物の訪問を待ち構えていた。

すると、遠くから生物がやってくるのが見えた。

ふわふわの毛並み。くるんと丸まったツノ。

それは羊のコスプレをした弟だった。

この羊は、金曜日の夜中に遊びにやってきては、いつも男に徹夜を強いるのであった。

しかし男は、そう毎週徹夜させられてたまるか、と思っていた。

窓が開いているのを見て、羊はウキウキになった。

「おや？ 今日窓を開けて待っていてくれたんですか？」

「ああ。お前が来ることが分かっていたからな。潮（うしお）」

「なっ、何を言ってるんですか！ 私は潮君ではありません！ 羊です」

「はいはい」

「さあ、今日も夜を徹して遊びましょう」

「なあ、今日はいいDVDがあるんだ。朝までこれを見て楽しもうぜ」

男は羊にDVDをさし出した。そこには『世界の羊たち』と書かれていた。

「えっ？ 羊？ 見ましょうすぐに！」

羊は大興奮だ。

男はDVDをデッキに入れた。

テレビ画面には、羊（本物）が次々と映し出された。

目をきらきらさせてテレビ画面に見入る羊を横目に、男はこっそりと寝室に移動し、そして睡眠をとったのであった。

2時間後。熟睡している男のもとに、羊が駆けつけた。

羊は布団をひっぺがして怒鳴りつけた。

「起きなさい！」

それでも男が起きないため、羊はデコピンを食らわせた。するとようやく男は目を覚ました。

「何するんだよ」

「それはこっちのセリフです！ いつの間に寝てるんですか！ DVDを見終えて隣を見たらあなたがない！ 何かと思いましたよ！」

羊はカンカンに怒っていた。

「確かにあのDVDは良かったですよ！ でもね！ あなたと一緒に見ればもっと良かったはずですよ！」

男はあくびをした。

「ブチーン！ もう完全にトサカに来ましたよ！ 羊だけど。だいたいあなたは寝すぎです。このままだと大変な事になりますよ。『兎と亀』のように」
羊は腕組みをして語り始めた。

「むかしむかしあるところに、兎と亀がいて徒競走中に兎が無駄な睡眠をとってしまい亀が勝ちました」

「相変わらず、はしよるよなあ」

「亀は大喜び。亀のトレーナーである羊も大喜びです」

「お前の傾向が分かってきたぞ。お前は羊が登場するまでの話をはしょっているんだな？」

「もちろん。羊の出ないシーンなんてつまらないでしょう？」

「そうだろうか」

「そうですとも！ そして亀に負けた兎は、兎の村から追放されました。これというのも無駄な睡眠をとったせいです」

「はいはい」

「名誉回復のために、狼を倒そうと戦いを挑みましたが、兎が狼に勝てるはずがありません。兎は、狼にボッコボコにされて、屈辱的な気持ちを味わいました。これというのも無駄な睡眠をとったせいです」

「わかったから」

「兎は思いました。『たった1回徒競走に負けたくらいで追放するなんて、非道過ぎやしないか？』って」

「それは、負けた理由が無駄な睡眠だったからだろ？」

「いいえ。あの兎は、兎村の村長が大事にしてた、秘蔵の心がしを勝手に食べたからです」

「ここで出たか、心がし」

「だから、この兎は遅かれ早かれ、何がしかの難癖をつけられて追放される宿命にあったのです。しかし、そんな事を知らない兎は、追放されたのは亀のせいだと思い込み、亀を呪うことに決めたのです」

「呪うだと？」

「ワラ人形と五寸釘を入手しました。あとは亀の体毛を入手すれば呪いの完成です。兎は亀の体毛を手に入れようとしてました。と！こ！ろ！が！ 亀は全身つるつるです。亀なのにつるとは、これいかに」

「うるせえよ」

「しかしよく見ると亀の甲羅に、1本だけ毛がそよいでいました。兎は見つからないように遠くからマジックハンドを使ってそれを入手しました」

「マジックハンドとかあるのかよ」

「いよいよ呪いの開始です。入手した毛をワラ人形にねじ込み、それを五寸釘で、どすっ！『うぎゃあー！』」

「効いたのか？」

「悲鳴を上げたのは兎だったのです。実は羊が、こんなこともあろうかと、あらかじめ兎の毛を

亀の背中に貼り付けておいたのです」

「羊のやつ、策士！」

「こうして兎は息絶えてしまったのでした。これというのも無駄な睡眠をとったせいです。おしまい」

「後半睡眠関係ないと思うけどなあ」

「とんでもないことです。あの徒競走中の惰眠さえなければ、こんな悲劇には見舞われなかったのですから」

「そうかなあ」

「そうですとも」

羊は立ち上がり、男の手を引いてリビングへ歩き出した。

「さあ、さっきのDVDをもう一度頭から見ますよ」

「えっ？ 見終わったんじゃないのか？」

「あなたと一緒に見るんですよ。そしてふたりで羊のかわいさについて朝まで語るんです」

男はモノポリーで遊ぶほうがずっと良いと思った。

終わり